

## 日本の数学「界」と数理学

加藤 十吉

私共の独立研究科には数学ではなく、数理学が冠されています。数学の「数」と応用数理の「理」とをとって「数理」といった感じで、英訳は *mathematics* です。なぜそのようなしなければならなかったのかとハッキリといえ、この半世紀の間のわが国の「数学界」は目覚ましい発展を成し遂げましたが、その結果として、応用数学を軽視してきたという事実があるからです。かって、応用数学の様々な分野の名

が冠せられた講座が「…数学講座」として存在していましたが、純粋数学の高揚にともない、そのポストを運用することもありました。私自身、最初に職を得たポストも、確か、統計数学講座であったと記憶しています。高度成長期の講座倍増時の改革のもとで、多くの主要大学からそうした講座名さえも消滅し、形式的にも、実質的にも上で述べた様な結果となったのです。このような歴史的背景を踏まえてか、あらたに高揚してきた応用数学界では応用数学ではなく、応用数理といい、その分野も「…数理」と呼ぶことが多くなっています。

中・高校生の数学離れが懸念されていますが、mathematics という学問自体の生命にかかわる「応用数学」が数学離れをしたという現実に向かっています。このことを日本の数学界のどの程度の方々が深刻にうけとめられているのでしょうか？ 私共は過去の歴史によって支えられ育まれてきたのですから、この半世紀を評価できる立場にありません。しかし、数学界の外に目を向けて見ると、なんとなく「数学」という言葉の背後に原罪感を持つし、他の学問分野との接点を失った様な疎外感すら持つてしまうのです。

確かに、短絡的に言ってしまえば、純粋数学は内在的思考形であり、応用数理は外延的思考形であって、学問の指向性は正反対です。ある意味では、水と土の違いに似ています。時として、清く流れるべき水は土に汚され、泥水として溜まり、大地に固まるべき土が水に流されることもあります。しかし、それぞれを個々に見れば互いに正と反の関係にあったとしても、それらの総体としての自然界では、水を介して土は一層肥沃になり、土を通して水は一層清められ、その流れを保ち、それぞれがいきいきと息づいています。本来、mathematics には、時として、厳しい葛藤も生ずるそうした正反合の弁証法的生成魂が息づいていたように思えます。

私共は、数理学の名のもとに、厚かましくも、わが国の数理学界にそうした気運が拡がることを期待して

おります、  
教養部廃止、大学院重点化の方針が決まって間もなく、日本数学会学術委員会はその対応についての Brain storming を開催し、そこで、私共は大臣官房の方から直接その意味を説明していただく機会に恵まれました。委員長の開会の挨拶は、かつての米国の若き大統領 J. F. Kennedy の大統領就任演説の一節を引用して、「国が何をしてくれるのかではなく、国に対し何ができるかを、問おうではないか」と結ばれました。そして、私共は、その改革の気運を千載一遇の機会として受け止め、全学の数学系教室（純粋数学5講座、情報数学4講座、応用理学3.5講座、教養部数学教室）の伝統の上に、現在、教官数72名（助手8名を含む）の大規模な、しかも、文字どりの数理学の大学院を実現させることが出来ました。皆様のご支援をこの機会にお願いします。この拙文も、その演説の一節で結びたいと思います。「さあ、皆さん、(数理学を)始めましょう」

(かとう みつよし、九州大学数理学研究科)